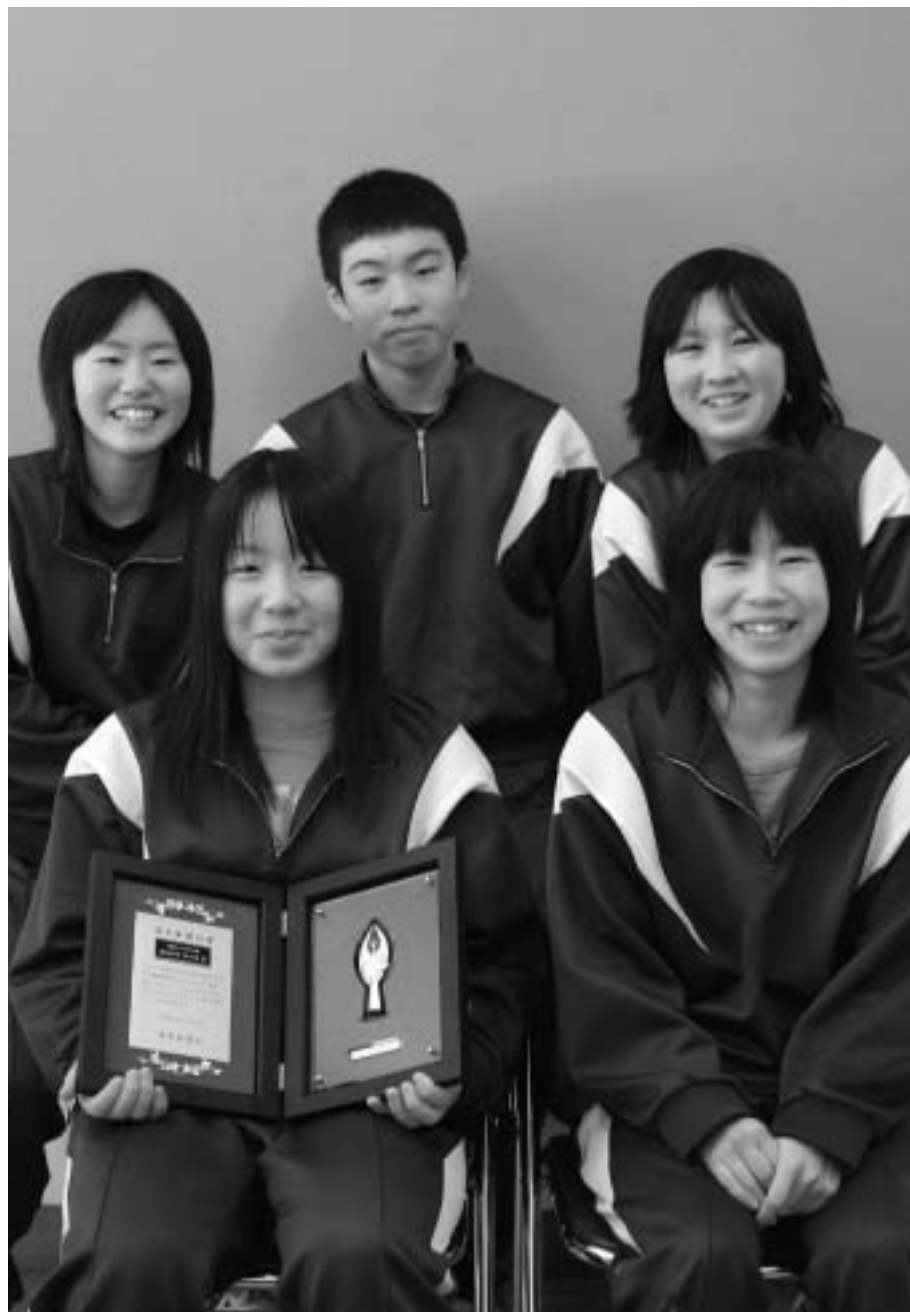


食の中に隠された科学をもっと知りたい

おともちゆう そうごうてきがくしゅきょうどしよくはん
小友中・総合的学習郷土食班



賞状を囲み喜びを語る柴又鮎美さん(前左)、松田真由美さん(前右)、小松ちえさん(後左)、浅倉裕輝くん(後中)、齋藤桃子さん(後右)

「がんばぎ」をテーマにした研究が、応募数八、四九七点の中から選ばれた。第五十一回日本学生科学賞中央審査で「読売新聞社賞」を受賞した小友中・総合的学習郷土食班の柴又鮎美さん(三年)、松田真由美さん(二年)、小松ちえさん(二年)、浅倉裕輝くん(二年)、齋藤桃子さん(二年)。

きっかけは二年前、「小友ががんばぎ」作りの名人、高橋ヨネさんから作り方を教わったこと。材料(小麦粉、牛乳、砂糖、はちみつ、重曹、酢)を見て感じた疑問「黒糖を使わないのに、なぜ黒いお菓子になるの?」「甘いお菓子なのに、なぜ酢?」。この「なぜ」が、二年間にわたる研究につながった。

黒さの秘密に迫った昨年は、重曹とはちみつが蒸されて化学反応を起こし、黒くなることを発見。今年の研究では、酢と重曹の化学反応が柔らかな触感を生むこと、分量やタイミング次第では効果が出ないことを知った。

「研究を通して、先人の経験と知恵のすばらしさを感じた」と語る班のリーダー柴又さん。本来、一年ごとに移動する総合学習だが、研究の楽しさから三年間同じ班で活動することを選んだ。実験に失敗し、嫌になったときでも、後輩たちがアイデアを出し、繰り返しの実験を笑顔で支えてくれた。「四人のおかげです」と後輩たちに感謝する。

その後輩たちはすでに来年の研究テーマを考えているという。「来年も最終審査まで!」と少し照れながら、抱負を語ってくれた。

●日本学生科学賞
 「科学の甲子園」とも呼ばれ、国内で最も伝統と権威のある中・高生のための科学自由研究コンテスト。全国から毎年6,000点以上が応募。各都道府県から中・高それぞれ3点中央審査へ進み、その中から最終審査で19点各賞に選ばれる。

夢への挑戦

【特集】「高校サッカー」



「俺たちも国立のピッチでプレーするんだ」
 2年ぶりに全国の舞台に戻ってきた「青と白のペンギン」遠高サッカー部。
 夢に向かって広いピッチを縦横無尽に駆け抜け、最後の最後まであきらめずにボールを追った。
 幾多の苦難と重圧を乗り越えてきた選手たちの一年間と、遠高イレブンの活躍に沸いた「サッカーのまち、遠野」を追った。